

## まぼろしの記

今年のをはりなる演奏會も今はてぬ。五時にといひおきしむかへの車、いかで來ぬにか。友はみな歸りて只一人になりぬ。窓に残りし夕日の光いよゝうすれゆきて、廣き室のうち寒くほのくらきに、何ともわかぬものゝ、おのが身にせまり來る心地して、たへがたければ、出て行くともなくいでゆきて、廊下にうつりぬ。こゝは又一入くらく物さびし。をれ曲りたる障子、細長き廊下の闇路たどりゆくほど、深きく奈落の底に沈みゆくらむ様に覺ゆ。玄關にたちいで見れば、迎への車のまだ見えぬに、いたうこうじたれど、かゝる時かゝる處にかくてあらんよりはと、門を出でて獨歩みそめつ。花紅葉の頃はさしも賑はゝしき忍が岡も、霜枯時の夕暮は。人影もなう心細きに、雪けの空の雲の絶間より、小さき星の一つ二つ見え初たる、はたあはれなり。あなたに見ゆる老樹の梢には、よひく毎に、さびしき、つめたき、さまざまの夢結ぶらんむら鴉の、今宵もそこに集ひ來つゝ、とりくくに時定むるよ。もろ聲になきたつる聲は、さながら我に物いふやうなり。さだめなき世に何物か住みはてむ。才ありとも、譽ありとも、短き命を何にかせむ。世にふる程はおのがじし人さまざまの道ことなれど、最後の家はひとつのみ。只一つの墓のみ。人一生の得物はたゞ死のみ、と一つの鴉はいふやうなり。いま一つのは、一入あはれげなる聲もて、死ねよく、とく死ね。胸の苦しび、語りあはさん友もなき人よ、とく死ね。我等はさる憐むべき人々の爲に、眞黒き喪のきぬ着て、悲しびの歌うたひつゞくるものなり。鶯の面白く、雲雀の樂しき歌とは異なりたる。我等が悲しき歌の心は、君もまたきゝわきがたからむ。それを聞きわか

んは、君が最後の家にいたりつきたる後なるべし。君をとぶらふ歌も早くとのへられつるを、そを歌ふべき日やいつならん。といふかと覺ゆ。さながら夢心地しつゝ、おのが身の今いづこをたどりゆくよとも知らで、老杉の並木のもとに至りぬ。風ありとも覺えぬに冷たきものゝ骨までしみとほるやうにて、ふと身の打ふるはれつ。道ゆく時おのが身のふと打ふるはるゝは、目に見えぬ怪しの靈のかけを踏みたればなり、といふ西の國のいひ傳へなど、思ひいづるもあやにくなり。折しも森のあなたに、蹄の音かすかに響きて、やがて遠ざかりゆく。これに又かのゲーテがエルケニーヒの詩、おもかげに浮びいでぬ。其詩に見えたる馬上の男、其かひなに抱かれたる幼子、其幼子をいざなひゆかんとする魔王の、恐しき顔かたちも目に見るやうなり。よき子よ、我もとに來ずや。かしこには、美しき花さき亂れたり。わが娘なる少女の歌もきかせん。そが舞も見せん、などさゝやきいふ魔王の聲も、いま此耳にきくかと覺ゆ。此恐しき詩に節つけしかのシューベルトがモルの調も、又いづこともなく響きそめぬ。魔王に捕へられんとして泣出したる幼子の、悲しき聲そのまゝなる、悲しとも悲しき調の、我胸にひゞき渡るよと思ふ折しも、大なる手の冷たきが、我肩先にふれたる心地す。と見ればかたへの大木、根ながら動きそめぬ。大木はやがて怪しき魔王の姿となりぬ。魔王は聲をひそめて、いざ來よとく來れといふ。覺えず遁れんとすれば、にげ給ふな。死は恐ろしきものにあらず。たゞ休みなり。やすらげきねぶりなり。とく來れ我導かん。と冷やかに打笑みつゝいふ。げに死はさもあらん。生きながらへて、空しく世のうき目見んよりは、と踏みとゞまれる折から、誰そや、道のゆく手

にまぼろしのやうなる人うすう見えぬ。そはなき我母の御姿なりけり。ものいひ給はねど、とくのがれよ、魔王になあざむかれそ、と手招きして教へ給ふやうなれば、其かげを追はんと足早にかけゆく程、夢ともわかず現ともわかず、志ばし我身も覺えずなりぬ。やがてふと心づけば、上野の森いつしかつきて、大路のともし火いとしぎはし。かへり見すれば、幻のかげ皆消えうせて、森かげ一つ朧けなるのみ。あゝ我はまた此世に歸りこしなりけり。あはれまた、明日をいかに過ぎむ。

底本…佐々木信綱編「竹柏園集 第貳編」

明治三十五(1902)年五月廿七日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年四月二十日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。